純潔の桜

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
純潔の桜

【Ｎコード】
Ｎ００２８Ｅ

【作者名】
イヌズキノネコ

【あらすじ】
【企画小説：羽篠紫（うしのゆかり）への参加作品です】桜と言えば、春に美しく花開く樹木として有名な植物である。だけど、すべてが全て美しい姿を見せるとは限らない。そう……この話に出てくる“桜”のように――

1（前書き）

この小説はある設定の下で書かれた作品です。『羽篠紫』で検索をかければ、他の先生方の作品を見る事が出来ます。もし宜しければ、覗いてみてください。

1

校庭の外枠をかたどる様に、ピンクの色彩を持つ樹木が並んでいる。この季節に見る事の出来る華やかな風景。風になびく姿は優雅であり、宙を舞う桃色の吹雪は見る者を和ませる。

四季相応の顔を見せる校庭から緩やかな坂を隔てた所には、黄土色をした運動場が見える。活気ある声がこだまするどこにでもある学校のグラウンド。日に焼けた小麦色の肌と時々見せる笑顔は、この場所の歴史として1ページを刻んでいた。

遠目で見つめる私は、窓枠を額縁にその光景を捉えていた。左手にパレットをのせて、右手に握られた筆で目の前の景色をなぞっていく。描きかけであるキャンパスの中央には、坂の上に佇む大木が下書きされている。校庭とグラウンドの合間に立つ大きな桜の木。校庭の桜から外れた場所にあるその木は、仲間外れにされた子供のように寂しく見える。身体に纏う衣もピンク色ではなく、青い葉で覆った緑色のモノ。昔からある古い木なのに“まだ大人になり切れていない”そんな印象を受ける桜だった。

その桜には、ある名前がつけられている。花を咲かせることのない不思議な桜――別名《純潔の桜》と。

◆

……これは遠い昔のお話。

ある山奥の森の中。雪に覆われた白銀の世界を、少女が一人歩いていた。少女は純白の衣を数枚上に着こんで、下は緋色の袴で足元まで隠している。最小限に露出を抑えられた姿は尊き者を思わせ、清楚な雰囲気を漂わせる彼女を神々しく見せていた。

少女は顔に笑窪を作り、汚れ無き白の大地を踏みならしていく。サクッと足音を鳴らせば北風が唄を披露し、はぁっと息を吐き出せば小さき雲が彼女を包む。雲から顔を出す少女は天日のような輝きを放ち、冬の気配をかき消すように凍える木立の間を通り抜けていった。

足跡を刻み続ける少女はある場所に来ると、前に進める足をピタッと止めた。首を左右に振って、辺りを見渡す。何かに期待する瞳は、周囲の風景を鮮明に映して出していた。しばらく時間が経つと、少女は首を振る事を止めた。何かを探していたみたいだが、どうやら見付からなかったらしい。少女は瞳を曇らせて、顔に影を落とした。そしてゆっくり体を反転させると、重い足取りで来た道を折り返していった。

森の中を歩き続けること十数分、少女の前にある建物が現れた。緑を切り開いて造られた人工的な場所に、縦長の建物が建っている。外見だけで判断するなら“蔵”と呼ばれるものだろう。少女はその建物に向かって足を進めた。ぐるりと建物の周りを回って、入口の前で足を止めた。

「ん？」

目を大きく開いて、驚いた表情を見せる少女。彼女の視界に映ったのは、扉の下でうつ伏せになっている少年の姿だった。
少女は少年の事を警戒しながら、倒れている彼の元へと歩み寄る。雪を踏む音が鳴り響く中、少年に動く様子は見られなかった。少年のすぐ傍まで近づいた少女は、膝を折り曲げて、そっと彼の顔に手を当てた。頬に触れた彼女の指先には、ひんやりとした感覚が伝わった。
「……死んでいるの？」
“死んでいる”――そう口にしたものの、少女はまだ信じ切れていなかった。冷静で居られた少女は引き続き、少年の様子を注意深く観察した。
足のつま先から徐々に視点を移動させて、腰、背中を通過する。最後に到達した頭の部分で、彼の口から微かに白い空気が流れ出ている事に気が付いた。そう……少年はまだ生きていたのだ。しかし、彼の身体は非常に危険状態だった。
状況を理解した少女は慌てて扉を開き、少年の身体を引きずって建物の中へと運びこんだ。

◇

灯篭（とうろう）に照らされた板張りの部屋。天井は高く、灯篭の明かりでも照らし切れていない。部屋の中央には囲炉裏があり、そのすぐ傍には一枚の布団が敷かれている。布団の中には男の子がいて、静かに寝息を立てていた。

音のない世界。静かに時を刻んでいる空間。そこに『ギィィ……』と扉の開く音がこだました。入口から姿を現したのは、艶のある黒髪をした女の子。女の子の手には青々とした山菜の束が握られていて、今さっき摘まれたばかりのようだ。

女の子は部屋に入ると、囲炉裏の前で座り込んだ。火にかけてあった鍋の蓋を開け、その中に山菜を入れて再び蓋を閉める。両手が空になった少女は音を立てずに立ち上がり、入口とは反対側の壁へと歩き出した。

ちょうどその時、少女が背中を見せている方向で少年が目を覚ました。少年は虚ろな瞳で天井を眺めている。見慣れぬ景色に戸惑う少年。身体を起こすと、ゆっくり首を回して部屋の中を観察し始めた。

灯篭の明かりにやさしく包まれた建物内。部屋の隅には祭事に使われる道具のような物が並んでおり、ほとんどの物が埃を被っている。ぼやけた視界と意識の中で、少年はある物音を耳にした。この部屋で唯一の格子窓を設けた壁の方から聞こえてくる音。『カツ……カツ……』と何かが合わさるような音。それは、窓の右隣に置かれた戸棚から、少女がお椀を取り出している音だった。

「あ……あの～」

少年は少女に声をかける。見えないところから聞こえる人の声に、少女はビクンと身体を震わせた。少女は長い髪を揺らして、身体を残したまま顔だけを後ろに向けた。

「ご、ごめんよ。驚かせるつもりは無かったんだ……」

硬い表情を見せる少女。だが、声の主が少年だとわかると安心したように頬を緩めた。

「ここは君の家のようだけど……僕は、どうしてここに……」

質問ともとれる少年の呟きに、少女は答えることなく黙っている。

少年は自分の置かれている状況を理解すると、柔らかい表情をして少女に話かけた。
「そっかぁ～、僕は君に助けられたんだね。どうもありがとう」
お礼の言葉を受けた少女は、体を少年の方に向けて「お礼を言われるほどの事では……」と呟きながら、恥ずかしそうな顔をした。
「ううん。どこの誰かもわからない僕を助けてくれて、本当に感謝している。僕の名前は和凪（かずな）って言うんだ。もし良ければ、君の名前を教えてくれないかい？」
少女は少年の要求にオドオドしながらも、「ゆ……紫（ゆかり）です。羽篠（うしの）……紫です」と答えた。少年は少女を見つめて、「いい名前だね」と微笑みを浮かべて囁いた。

◇

雪解け水が川に溶け込み、森に暖かい日差しが差し込むようになった頃。和凪は紫の介抱のおかげで、失った体力を取り戻していた。冬という食材が調達しにくい時期のせいで体力を回復するのに時間はかかったが、今では普通の人と同じように身体を動かせるまでになっていた。
長い時間を共に過ごした二人は、会話を通して互いの事を知り合っていった。和凪は自分が各地を旅している事を、一定の場所に留まる事のない浮浪人である事を打ち明けた。一方紫は、１４の歳になるまでこの建物から外に出た事がないと和凪に話した。彼女はある特別な役割を任せられた巫女だという。詳しい内容は口にしなか

ったが、その役目のために１４歳まで――今が１４歳であるから、つい最近まで――外出を禁じられていたらしい。小さな世界での生活を余儀なくさせられていた紫にとって、和凪が語る旅の話は魅力的なモノだった。和凪が思い出を語ると、紫はいつも目を輝かせて話を聞いた。

和凪の体調が良くなって、もう介護する必要がなくなったある日。紫は大きめの風呂敷に何かを包んで、建物の外へと出かけていった。和凪は「部屋で寛いでいて下さい」と言われていたが、紫の動向がどうしても気になって彼女の後をこっそりと付けた。

森に入った紫はしばらくして、日陰となっている大きめの岩に腰を下ろした。手に持っていた風呂敷を広げると、そこから一枚の和紙を取り出し、次に一本の筆を手に取った。真剣な眼差しで辺りを観察する紫。観察が終わると、風呂敷から更に硯（すずり）を取り出した。硯に水を注ぎ、墨を作り出す。それを筆に馴染ませて、手元の和紙上で筆を走らせた。

離れた場所から様子をうかがう和凪は、彼女が絵を描いているのだろうと考えた。実は、彼女の部屋に何十枚もの水墨画がある事を和凪は知っていた。

和凪は極力足音をたてないようにして、夢中で筆を動かす紫の元へと歩み寄った。

「へぇ～」

紫の後ろから和紙を覗き込む和凪。そこに描かれているのは、木漏れ日の中で静かに咲く時を待つ野花たちだった。

「いい絵だ……」

紙の上で命を咲かせる花たちに、思わず和凪は本音を零した。

「ん？」

風に運ばれてきた言葉と背中に感じる人間の気配に、紫は手を止めて後ろを振り返った。

「か、和凪さん！？」
驚いた顔を見せる紫に、和凪は笑顔で対応した。
「ごめん。悪いとは思ったけど、こっそり後をつけさせてもらったよ。それ……いい絵だね？」
「……え？　そ、そうですか？」
膝の上に置かれた和紙に目を向ける紫は、照れたように顔を赤く染めていく。
「絵を描くの……好きなの？」
「う、うん。外に出られなかった頃、絵を描くことだけが楽しみだったから」
「そっか……」
自分とは真逆の人生を送ってきた紫に、和凪は胸が痛くなった。込み上げてくる切なさを押さえて、和凪は笑った顔を見せ続けた。
「邪魔しちゃったね。僕は戻るから、絵の続き……描いて」
そういうと和凪は身体を翻(ひるがえ)し、紫からそっと離れていく。離れていく和凪に対して、紫は不安げな表情をした。
「……和凪さん」
和凪は微笑みを浮かべて、紫に手を振る。
「じゃあ、また後で」
「あ……」
去りゆく和凪を見つめる紫。遠ざかる和凪の背中に、紫は思わず声をかけた。
「あ、あの！」
「ん？」
「あ、あの……迷惑でないのでしたら、そ、その……一緒にいて……くれませんか？」
紫は頬を赤らめて、懸命に口を動かす。そんな紫に和凪は優しく微笑み、「うん」と短い返事を返した。

2

外気が暖かさを持ち始め、色を付けた植物たちが森を華やかに演出し始める。長い眠りの時は終わりを告げ、目覚めの時が針を進め出していた。

季節の移ろいに伴って世界が姿を変えてゆく。その中で、和凪の心にも変化が起きていた。

生活を一緒にしてきた紫に親しみを抱き、共通の時間を過ごした彼女の部屋は居心地の良いものへとなっている。“このままずっとここに居たい”そんな気持ちが芽生えていた。だが、それは同時に和凪にとって悲しい知らせでもあった。旅人である和凪は一つの場所に留まらない。この場所も例外ではなかった。“もうそろそろここを離れなければいけない”和凪は心の中でそう思うようになっていた。そしてその別れの時は、意外に早く訪れるのだった。

朝と昼の中間。一日の中で最も過ごしやすい時間帯。和凪はいつものように旅先の思い出を語り、紫はその話を嬉しそうに聞いていた。二人にとっては日常と化した行動。一日を楽しく迎えるための行事。時間も忘れて会話をする和凪と紫は、この時間がもうすぐ奪われることになるなど思ってもみなかっただろう。

和やかな雰囲気の漂う二人の生活空間。それを壊すように突然入口の扉が開いた。扉の向こうに立っていたのは、紫と同じような服装をした女性だった。

「紫様、お久しぶりです」

お辞儀をする女性は長い髪を一つに結っていて、身につけている物にはしわがない。凛とした表情の女性は、“清潔”という言葉が似合う女の人だった。

紫はその女性を見るなり、先程まで浮かべていた笑みを一瞬にして崩した。
「随分とお会いしておりませんでしたが、お元気そうでなによりです」
女性は紫を見つめて、柔らかい表情をする。
「あら？　紫様、そちらにいらっしゃる方は？」
女性が和凪の存在に気づく。すると表情を一変させて、不快な物を見るように冷たい視線を和凪へと送った。
「椿（つばき）さん、彼は……」
紫が消えそうな声で返答する。紫の声が耳に入っていないのか、椿と呼ばれる女性は更に質問を続けた。
「こんな薄汚い者が、何故（なにゆえ）この場所にいるのですか？」
「それは……実は、彼がこの建物の前で倒れていたので、それで……」
「助けた……と？　紫様、この神聖なる場所に穢れを持つ者が踏み入っている事実を分かっておられますか？　特に、あなたはその身を神に捧げる使命を背負った巫女。こんな者と一緒にいて良いとお思いですか？」
「そ、それは……」
悲しい瞳をする紫は、椿の視線から逃れるように俯いた。
「そこの者、早急にここを立ち去りなさい。ここに留まれては紫様の害になる」
強い口調でキツイ言葉を吐く椿に、和凪は怒りを覚えた。確かに命を救ってもらった上、長居させてもらった事を悪いとは思っていた。それを紫が好ましく思っていないのであれば、椿の言い分にも納得できただろう。しかし、紫からそんな言葉を言われた事はなく、そういう素振りをされた事もなかった。つまり、突然現れた椿が自分勝手な意見を述べているだけなのだ。しかも、和凪の事を汚れた物として見ている。
頭に血ののぼった和凪は、「あんたに言われなくても、出るつも

りだった」と強気な姿勢で応戦した。それを聞いた椿は表情を変えず「それなら、今すぐに出ていきなさい」と言い放ち、外へ出るように催促をした。

「和凪さん……本当に出ていかれのですか？」

弱々しく紫が尋ねる。

「うん。もうそろそろ行かなくちゃって思っていたからね」

和凪は意思を変えることなく、肯定する言葉を口にした。

「そうですか……」

「そんな悲しい顔をしないで。二度と会えなくなるわけじゃないから」

「……」

別れを惜しむ紫を残して、和凪は荷物を手に持ち、入口へと歩き出した。

「さようなら……和凪さん」

和凪は後ろ髪を引かれる思いをグッと堪えて、椿の横を通り過ぎて外へと出ていった。

◇

紫の元を離れた和凪は、山を降りたところにある小さな村へと辿り着いた。田圃（たんぼ）が広がるのどかな場所で、和凪が今歩いている畔道（あぜみち）の脇には、腰をおろした農民たちが楽しげに談笑している。

そのまま畦道を突き進んでいくと、この村の住人たちが生活を送る集落に行き着いた。通りを子供たちが駆けまわり、民家の前では女たちが集まって話し合いをしている。そんな日常の風景をおぼろげに眺めながら、和凪は村の中を通り抜けていった。ふと気が付けば、村の出口まで来ていた。

「釈然としない顔して、どうしたんだい？」

どこからか聞こえてくる低めの声に、和凪は呼び止められた。首を回して辺りを見渡すと、村の門の傍で男が地面に大きな布を広げて商売をしていた。

「良くない事でもあったのかい？　そう言う事なら、ちょっと寄って行きなよ。ここに並んでいる品物は、普通じゃ手に入らないものばかり。兄ちゃんの浮かない気持ちを晴らしてくれるよ」

男が自慢げに両手を広げる。布の上には、陶器、木彫、着物から、農具、刀などさまざまな種類の品が並んでいた。和凪はその中で、ある商品に目を止めた。それは桜の花をかたどった髪飾り。紫ぐらいの子が付けていておかしくない髪飾りだった。

「お？　兄ちゃん、その髪飾りが気に入ったのかい？」

「……ちょっと」

「ふぅ～ん。さては、女か？」

男の言葉に黙り込む和凪。さっきまで一緒だった紫の顔が、和凪の脳裏を掠めた。

いつも笑顔を見せてくれた紫。眩しいほどの白い肌とつぶらな瞳が作り出す笑みは、どんな苦しみも癒してくれた。そんな彼女が最後に見せた、たった一度だけの悲しげな表情。命を救ってくれた彼女に何の恩返しもせず、立ち去ってしまった事への後悔。紫と別れてから胸に妙なしこりが出来ていた和凪は、その原因がこれであるとようやく気が付いた。

やるべきことが見つかった和凪は、桜の髪飾りを手に取った。そして懐から小さな巾着を取り出して、男に代金を支払った。

◇

髪飾りを買った和凪は、今さっき歩いて来た道へと身体を向けた。右手に髪飾りを握りしめ、趣(おもむ)くままに一歩を踏み出す。今まさに走りだそうとする和凪。そんな彼に対して、商人の男は何気ない質問を投げかけた。

「そういえば兄ちゃん、あんた見ない顔だね？　この方角から来たって事は……まさかあの山を越えてきたのかい？」

「？　そうだけど……」

不意に足を止められた和凪は、振り返りざまに答えを返した。

「まさかと思うが、あの山にまた戻る気じゃ……ないだろうね？」

男がなぜそんなことを訊いてくるのかわからい和凪は、戸惑いながらも首を縦に振る。それを受けた男は眉間にしわを寄せ、表情を硬くした。

「兄ちゃん、それは止めときな。知らないかもしれんが、あの山は神がいると言われている所だ。ここら辺に住む者は、近づくことさえしねぇ」

真剣な面持ちで注意を促す男に、和凪は無言のまま立ち尽くしていた。

「兄ちゃんは悪い人じゃなさそうだし、教えといてやるよ。あのな……」

顔をしかめる男は渋めの声で、この土地の歴史について語り出した。

……昔、あの山で木を切っていた男たちがいた。金になる木が沢山あるという事で、彼らは毎日のように山へ入っては木を切り倒し、森を汚(けが)していった。

そんなある日、男の一人が奇怪な死を遂げた。木の蔓(つる)に足を捕られて、逆吊りになった状態で発見された男は、地面に頭を打ちつけて死んでいたという。更にその翌日には、切り倒した樹木の下敷きになって、別の木こりが命を落とした。悲劇はその後も立て続けに起こり、最終的に山へ入った全ての人間をこの世から消してしまった。

怖れを感じたこの村の人々は、彼らが木を切り倒した場所に社(やしろ)を建てて、神の怒りを鎮めると同時に神への忠誠を誓った。

「数百年も前の話ではあるが、実は……村人が建てたという社は今でも残っているんだ。その社っていうのが、あの山にある《羽篠神社(うしのじんじゃ)》の事らしい」

「うしの……」

和凪は聞き覚えのある言葉を耳にして、この話を聞き流して良いモノではないと感じ取った。

「それとな、最近でも起きている事なんだが……あの山に入った人間はどこかへ姿を消しちまうんだ」

「姿を……消す？」

「ああ。いわゆる“神隠し”というやつだ」

信じがたい話に和凪は少し疑いを抱いた。だが、険しい表情の男を見ていると、そんな疑いもすぐに消え去った。

「わしの知人も被害に遭ったんだ。数年前に……」

「それで、あなたの知り合いの方は今も？」

男が首を横に振る。そして、切なげな表情で小さく呟いた。

「数か月前に戻ってきたよ……屍となってな」

男が言葉を言い終えると、二人の間に重々しい空気が流れた。

神が住み着く山。
危険が潜む山。

全てを打ち明けた男は、彼の気持ちが少しでも変わってくれることを願うように、じっと和凪の事を見つめていた。

しばらく沈黙を続けた後、頭の整理が出来た和凪はそっと口を開いた。
「おじさん、ありがとう」
和凪は笑みを浮かべて、柔らかい表情をしている。
「じゃ、じゃあ――」
「でも、僕は行かないといけないだ。折角忠告してくれたのに……ごめん」
頭を下げて謝る和凪に、男は落胆の色を隠しきれなかった。俯く男は、無念の思いと共に溜息を零した。
「そうかい……やっぱり行くのかい？」
「うん」
「……わかったよ。これ以上は止めねぇ」
心配してくれる男に、和凪はもう一度「ごめん」と頭を下げた。

全ての事を理解した上で山へ入る事を決心した和凪は、全身にギュッと力を入れた。危険だと知った以上、気を引き締めずにはいられなかった。
「兄ちゃん、身を守るモノはあるのかい？」
落ち込み気味の男は和凪の身を案じて、最後の最後に確認を取った。

「一応これくらいなら……」
和凪は懐から使い古された小刀を取り出す。
「それじゃ獣も追い払えねぇ～な。よし、それならコレを持っていきな」
男は商品として並べていた脇差を一本手に取ると、和凪に向って差し出した。
「くれるの？」
「ああ、餞別だ。受け取ってくれ」
和凪は男から渡された脇差をすぐさま腰にくくりつけた。ずっしりとした重さが加わる事で、和凪の表情はより一層引き締まった。
「それじゃあ」
凛々しい表情で片手を上げる和凪。
「ああ、行ってきな。そして無事に戻ってこいよ」
男に別れを告げた和凪は、紫の元へと駆け出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0028e/

純潔の桜

2010年10月9日21時07分発行